

令和2年度 hug くむ保育園長沼評価書

※当評価は職員の自己評価を参考に、更なる質の向上や意識向上を目的に施設長が総合的に厳しく自己評価したものです。保護者様による利用者側の視点については別途、「保護者アンケート」をご参照ください。

I 経営の重点に関わる事 評価段階（A：大変良い B：まあまあ良い C：あまり良くない D：全然良くない）

1. 園教育（卒園目標）：社会に出ていく為の基礎ができた子 保育目標：「内面的安定」「自立心」「自律心」 育成目標：「自分の力で気づける子」「自分の考えが持てる子」「行動を繰り返せる子」			
重点目標	評価指標	評価	自己評価
社会に出ていく為の基礎ができた子	特定他者との安定した愛着の形成がなされ、内面的安定が図られるよう向き合っている。	おおむね出来ているが一時的に不安感を強めている子どもに対し、成長による発達特性や家庭環境の変化に応じた向き合い方などへの配慮に課題がある	B
	人や物に関心を示し（気づき）探索活動の範囲を広げられるよう向き合っている。	子どもの能動的な探索活動を阻害するような関りはないが、意図的に気づきを促せるような関り方や環境構成については課題がある。	C
	探索活動の中での不安・怖れ、あるいは喜び楽しさを受け止め、内面の安定を図れるよう向き合っている。	年齢が上がるにつれ、探索活動に伴う子どもの不安や恐れがある事に対する意識が薄くなる傾向がある。喜びや楽しみに対してはくみ取れている。	C
	「～したい」という、自らの考えを持てるよう子どもに向き合い、また子どもの考えをくみ取れるようにしている。（行動しやすいよう促している）	子どもの想いを尊重しようという姿勢は見られるが、園の流れや職員の動きの都合で児を誘導する事が多い。	C
	行動によって生じた結果に対し、自己肯定感（自己有能感）を持つ事ができるよう向き合っている。	設定保育や意図の明らかな遊びの中では自己肯定感を育むよう向き合っているが、その他の生活上での「できた」や自由保育中の表れ、成長による変化に対してはまだ気づかない事が多い	C
	お友だちの気持ちに気づけたり、次の行動を見通すことができる促しをしている。	言葉で伝える事に偏重していたり、お友達の気持ちに気づくまでの発達の課題にアプローチが出来ていない。	D
2. 保育方針			
評価指標	評価	自己評価	
根拠に基づく保育を実践します。	着替え・食事・排泄など身辺自律動作では少しずつ発達を意識した関りが出来てきている。遊びや対人関係などについては知識と実際の子どもの姿が結びついておらず課題がある。	C	

子ども自身の発達状況や個性を尊重します。	個別での対応については出来てきている。集団になると集団のルール・流れに子どもを合わせようとする姿がまだ強い。	C
子どもの目線・気持ちに立って子どもの行動を考えます。	子どもの気持ちを聴くことはできているが、年少児の為、言葉だけでなく状況や背景にまで目を向け、正しく子どもの行動をつかむには課題がある	C
子どもの話しや想いを聴いた上で、伝え導いていきます。	子どもの気持ちを聴くことは出来てきた。伝え導く際に言葉に頼りすぎていたり、発達上の次の課題を見据えた目標設定に課題がある	C
「いいところ見つけ」を心がけます。	子ども達の良い所を見つける姿勢は全職員の中にある。見つけた良い所を子ども達にアウトプットし、子ども達の自己肯定感につなげられると良い。	B
やり方を教えるだけでなく、「やってみたい」「学びたい」という意欲も育みます。	どうしたら子どもの意欲につながるかという意識を全職員が持てるようになってきた。ご褒美や褒めるという結果へのアプローチだけでなく、発達段階に沿った意欲の育て方ができると良い。	B

II 施設機能に関わる事

大項目	中項目	評価指標	評価	自己評価
小規模保育施設における保育	発達の連続性を考慮した保育	0歳から3歳までの発達を理解し、子ども発達や実態に合わせて遊びの充実をしている。	年齢が上がるにつれ発達に合わせた遊びが提供できているが、年少児への遊びは改善が必要。	C
	一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	園児一人一人の生活や経験、発達過程を理解し、安定した穏やかな気持ちで園生活ができるように子どもの想いに寄り添い関わっている。	一部の職員は子どもの気持ちに合わせて話を聴いたり、待ってあげるなど寄り添う事が出来るようになってきた。全職員ができるようになると良い。	B
	環境を通して行う保育	子どもの成長につながるよう考え、遊びの展開に応じて環境の再構成を工夫している。	子どもの次に身に付けるべき発達課題を意識した環境構成ができると良い。	C
安全管理・指導	事故防止・防災	様々な状況を想定し、危機管理体制を職員全員で作成し、園児にも安全行動を身につける指導をしている。	防災・防犯に関しては様々な状況を想定した訓練を実施し、職員の動きも迅速かつ柔軟な対応ができるようになってきた。一方、日々の保育中の事故についてはインシデントの意識が少なく、怪我や子ども同士のトラブルの予測が不十分。	B
保健管理・指導	生命の保持	<ul style="list-style-type: none"> 安定した生活リズム（睡眠・食事・排泄等）の管理を行っている 「おいしく・たのしく・たべる」をテーマに、様々な形で食に関わる体験ができるよう工夫している。 	一人一人に合った睡眠・食事・排泄などを行っている。睡眠については入眠時の寄り添い方などここに応じた工夫している。トイレトレーニングも適切なタイミングで行えている。食事については個々に合わせきめ細かく配慮している。	A

	健康教育の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・園児の健康状態の把握に努めている ・園児の発育・発達状況の把握に努めている。 ・園児に手洗い・うがい等の生活習慣を身につける指導をしている。 	<p>健康状態の把握は日々努めている。</p> <p>発育発達状況については担任と他の職員で共有できると良い。</p> <p>トイレの前後、お散歩からの帰園後など適切なタイミングで指導できていた。</p>	B
特別支援教育	支援体制の構築	<ul style="list-style-type: none"> ・全職員が園児一人一人の子どもを理解し、子どもの関わりに対し共通認識を持ち援助をしている。 ・特別な支援が必要な園児に対応するため、発達障害や病気、その他の特別な支援について、様々な知識の研鑽に努めている。 	<p>発達の気になる子に対し、会議の場を通して情報交換や園長・主任を中心に関わり方の指導など行っている。</p>	A
組織運営	組織体制の充実	園運営（行事・保育・保護者対応など）について職員間で連携を取り合い、保育を進めている。	園運営については全職員が連携し取り組んでいる。また翌年に向け振り返りなども十分に行っている。	A
研修	研修体制の充実	保育理念・目標・方針を実践に活かせる研修ができている。また実践に活かせる具体的な手立てや教材研究を行っている。	新型コロナウイルスの関係で外部研修については全く行えなかった。内部研修では事例検討を通じ一人一人の子どもの発達や保育に活かせる研鑽を行うことができた。	B
教育・保育環境の整備	教育・保育環境の充実	子どもが「楽しい」「またやりたい」と感じ、保育者自身も目的を持った環境や教材の工夫をしている	一部の職員は子ども達の意欲を育む工夫を毎回、工夫し実践している姿があった。全職員が出来るようになることが課題。	B
家庭との連携	家庭環境への支援機能の充実	保護者からの意見や要望、相談事を早目に解決できるように、保護者と職員が話し合いの場所をつくり、園からのおたよりを発行している。	日々のやり取りや面談の中で、保護者の抱えている不安や悩みをくみ取り、会議の場などで話し合ってきた。	B
連携園との連携	連携園との連携の推進	連携園に親しみを持って交流する機会を作っている。	新型コロナウイルスの関係もあり、連携は十分ではなかった。	D
地域との連携	信頼される園づくりの推進	園外保育や地域の多施設と交流し、近隣住民との触れ合いに努めている。	お散歩などを通じ地域の方と触れ合ったり、世代間交流を行事に含んだりしたが。新型コロナウイルスの関係で積極的とまでは行かなかった。	C

Ⅲ 園としての保育の総括

保育士一人一人が考えた保育を実践するように意識づいた一年であった。また行事などはコロナ禍にもかかわらず、ほぼ例年と変わらず実施できた。また職員間の連携も主任を中心にとれていた。一方、発達に対する知識が乏しく、特に0歳児の保育では遊びの選択、遊びの展開など工夫できる点が沢山あった。また通院を要する怪我も発生しており、安全に配慮した環境構成や子ども達の行動特性の把握にも課題が見つかった一年であった。

Ⅳ 園としての経営の総括

職場環境の改善に努めた一年であった。職員間のコミュニケーションが活発になり、雰囲気の良い職場環境を構築する事が出来てきた。一方、園児の獲得が進まず経営的には厳しい一年となった。少子化や市内の園の増加による影響が大きく、今後は市からの紹介を待つだけでなく、園の認知度を上げる事や、更に保育の質を向上させ選んでいただけるような働きかけが必要だと感じた。